

／／／／／／／／／／／／／／／／

AmericanFootball WorldCup2003 NEWS

No.002 2003.7.8

／／／／／／／／／／／／／／／／

7月9日現地時間午前。フランクフルト日本総領事館に、今回の日本代表チーム応援のお礼のために日本アメリカンフットボール協会理事長一行が訪問した。

岡田眞樹総領事（54）の子息が通うフランクフルト日本人国際学校では、10日のフランス戦に全校挙げての応援を行う。

金沢理事長は、日本代表の阿部監督、佐々木主将のサイン入りボールと日本選手団全員のサイン入り色紙を領事館に贈呈した。

また同日午後より、この日本人国際学校を協会関係者が訪問した。

日本人国際学校（田原邦夫校長）は、現在小学生約180名、中学生60名が在籍しており、教職員を合わせて280名が日本代表の応援に駆けつける。

協会ではこのお礼を兼ねて、放課後の時間を利用して、フラッグフットボール教室を開催した。

約1時間の講習に引き続いて、最後は女子小学生と、平均年齢60才の協会幹部メンバーが対抗ゲームを行い、笑い声の絶えない和やかな雰囲気で終了した。

／／／／／／／／／／／／／／／／
AmericanFootball WorldCup2003 NEWS

No.003 2003.7.8

／／／／／／／／／／／／／／／／

ワールドカップ2003初戦を明日に控え、最後の調整に余念がない日本代表チーム。
7月9日は、宿舎でもあるスポーツシュレー（フランクフルト）に併設されたフットボールスタジアムで、試合開始と同じ現地時間14時から最終的な練習を行った。

このスタジアムは、NFLヨーロッパのフランクフルト・ギャラクシーが練習場として使っているということもあり、芝のコンディションは本番の試合会場（スタジアム・ベルリーナ・シェトラーク@ウィースバーデン）と大差なく、選手達は個々にスパイクを調整するなど、芝の感覚を確かめていた。

現地時間20時から、最後の全体ミーティングが行われ、オフェンスとディフェンスそれぞれ細かな部分にいたるまでの綿密な打ち合わせをした。

●阿部敏彰監督コメント（インタビュー）

天候にも恵まれて、45名がこれ以上はないという状態に仕上がった。相手が大きくて強いというのは最初からわかっていることだから、ゲームプランをきっちりとって、選手も我々コーチ陣も最後まで集中力を持ってきっちりとやりたい。

厳しいゲームになるだろうが、勝つために選手達は集まり、ここまできた。参加するだけではなく、連覇しなければなんにもならない、そのために我々はドイツまで来たのだから。

久しぶりに本当に強いチームとの対戦を控えて楽しみである。

●大橋誠ディフェンスコーチ（ハドルで）

リアクションではなくアクション。腹を据えて最初のコンタクトで殴られる前に思いっきり殴る。そのためにプレーのアサインメントをきっちりやる。明日は朝起きた瞬間からすぐにでも全力が出る気持ちで臨んでもらいたい。

●森清之オフェンスコーチ（ハドルで）

フィールドには最高の闘志で臨んでもらいたい。みんなにはそれをやる責任があるし、それをきっちりと行うためにも、いまから明日のキックオフまで、やれることは全てやっておいて欲しい。

● R B 森本裕之選手（インタビュー）

ドイツに来てようやく実感がわいてきた。大きい相手と当たることを自分でイメージしながら考えているが、Xリーグでも当たる選手はいつも自分より大きいのであまり気にしていない。最初のプレーでは自分から思い切り当たって行って相手の感触を確かめたい。



またこの日は、有志参加のXリーグチアリーダー30名も現地時間14時にフランクフルトに到着。現地時間18時から、選手と同じスポーツシュレーのスタジオで、長旅の疲れを全く感じさせない本番さながらのリハーサルを2時間ちかく行った。

● 藤島紀子ディレクター（インタビュー）

これまでの道のりは険しく、ドイツという遠くて情報の少ない場所での応援は、ただただ日本代表チームの勝利を導くきっかけとなればという強い思いがメンバーの心を一つにしていた。

明日への準備は万全。メンバー全員が心地よいテンションを保っている。

／／／／／／／／／／／／／／／／

AmericanFootball WorldCup2003 NEWS

No.004 2003.7.10

／／／／／／／／／／／／／／／／

I F A F アメリカンフットボールワールドカップ2003は、7月10日にドイツ・ウィースバーデンのスタジアム・ベルリーナ・シェトラーゼで大会初日が行われた。

第1試合は、前回大会の優勝国である日本代表チームと、初参加ながらヨーロッパ予選を圧倒的な力で勝ち抜いてきたフランス代表が対戦した。結果は23-6で日本代表がフランス代表を破り、12日の決勝戦へと駒を進めた。

また第2試合は、前回準優勝のメキシコ代表と、開催国である地元ドイツ代表の間で争われた。試合は激しいシーソーゲームとなったが、最後は21-17の僅差でメキシコ代表がドイツ代表を下し、この結果、決勝戦は日本代表とメキシコ代表が激突することとなった。

日本代表の先発QB冨澤は、試合開始から積極的なパス攻勢を試みるが、決め手に欠き、なかなか得点には至らない。

フランス代表もエースQBルラーのパスを交えながら、ランアタックを軸にオフェンスを展開するが、日本代表ディフェンス陣の激しいプレッシャーを受け、ダウン更新すらままならない状況が続く。

結局、両チーム0-0のまま前半戦を終了した。

試合が動いたのは後半。フランス代表が自陣の奥深いところから蹴った4thダウンパントのボールを、DB大島がはじき返し、DB市川がエンドゾーン内でそのまま確保して先制のTD奪う。

このプレーで日本代表に流れが一気に押し寄せる。

その後K小山が3本のFGを成功させ、またQB冨澤も31ヤードのTDパスを決めるなど、フランス代表を圧倒。

最後のシリーズでは、QB波木も出場を果たし、ワールドカップでの初めてのパスを成功させた。

●阿部敏彰監督

結果的にゲームプラン通りだった。ここまでけが人が多く、いろいろと修正しながらや

ってきたが、いい結果が出て良かった。

1 TD、1 FGの勝負になると思っていた。フランスはディフェンス力も強く、逆に後半は、なにがなんでも点を取ってやろう、という意気込みで臨んだ。

7月のデーゲームは暑くてきつかったが、ウチは川崎でこれ以上の環境でやってきているので、我慢比べなら負けなかつもりだった。

●LB山田晋三コメント

ディフェンスはウチのいいところが出せて良かった。相手のディフェンスにはNFLヨーロッパの選手もいて、簡単に点が取れる相手ではなかったので辛抱しながらチャンスを待った。

●DB大島康司コメント

たまたま上手くいった。パントブロックのサインは出ていたので、思い切って出ていったのが良かった。怪我のこともあって出場したのはこのとき（TDになったブロック）だけ、ラッキーでした。

●QB富澤優一コメント

今日はディフェンスに感謝。後半は進むようになったので次はもっと上手くやりたい。大きい相手とやるときはワンチャンスずれるともう遅い。世界は広いです。

●フランス代表 ソレーティエリ監督

（日本代表は）速く、システマティックで、規律統制(Discipline)のとれたワールドカップ決勝進出にふさわしいチームだった。

前半は耐えることが出来たが、スペシャルチームのビッグプレー（DB大島のブロック）で変わってしまった。

チームフランスとしても、次のステップアップへの目標が出来た。

／／／／／／／／／／／／／／／／

AmericanFootball WorldCup2003 NEWS

No.006 2003.7.12

／／／／／／／／／／／／／／／／

I F A F アメリカンフットボールワールドカップ2003決勝戦は、現地時間7月12日18時（日本時間13日午前1時）より、ドイツ・ハーナウのハーバート・ドロゼ・スタジアムで行われ、日本代表とメキシコ代表が対戦。2大会連続の顔合わせとなった。

立ち上がり早々、メキシコ代表QBアルタミラノの40ヤードロングパスが決まり、一気に日本陣内7ヤードに攻め込むと、RBバレラがこれをねじ込んでTD(TFPキック成功)。メキシコ代表が先制する。

日本代表も1Q終了間際に、PR清水の好リターンで得たゴール前26ヤードのチャンスに、RB森本のランでダウンを更新すると、QB冨澤からWR板井へ9ヤードTDパスがヒット。7-7(TFPキック成功)の同点とする。

さらに日本代表はメキシコ代表QBアルタミラノが自陣30ヤード付近から投げたパスをLB玉井がインターセプト。そのままエンドゾーンに持ち込んでTDを奪い14-7(TFPキック成功)。

前半終了間際にも、K小山が33ヤードFGを成功させ、17-7で折り返した。

後半開始早々、交替出場したメキシコ代表QBサモラのパス、RBベルトランのランが日本代表ディフェンス陣を切り裂く。

後半開始のファーストシリーズこそエンドゾーン内でDB玉ノ井がTDパスをインターセプトして事なきを得たものの、続いてのシリーズでは、4連続パス成功で、瞬く間にゴール前6ヤードへと進む。

最後はWRウォンにTDパスが通り、17-14(TFPキック成功)と追い上げる。

しかしここで、QB冨澤からボールを受け取ったRB波武名が、メキシコ代表ディフェンスのタックルを次々と交わし、59ヤード独走のTDラン(TFPキック成功)。

これで24-14。メキシコ代表に傾きかけたモメンタムを一気に引き戻すプレーが飛び出す。

さらに第4Q。4thダウンFGトライの体勢から、ホルダーに入った稲垣が、スナッ

プされたボールをそのまま持ってエンドゾーンに走り込みTD(TFPキック成功)。31-14とし、試合の行方をほぼ決定づけた。

この後も、ランオフenseでじわじわと時間を消費しながら、K小山が30ヤードのFGを決めて追加点を奪い、ファイナルスコア34-14で日本代表が勝利。

第1回に引き続き、2大会連続となるワールドカップ優勝を果たした。

なお、大会MVPにはRB波武名生則（日本）が選ばれた。

●阿部敏彰監督

今日は波武名につきる。あれで流れを取り戻せたからね。予想以上にやられたなというのが本音。負けないと言う自信はあったけど、フットボールはホントに奥が深い。今回はいつもXリーグでもまれているメンバー（選手、コーチ陣）だからこそ対応していったと思う。

●LB山田晋三

相手のオフenseが結構速くて、止まらない場面もありましたが、なんとかJAPANらしいディフェンスが出来たと思います。

●RB波武名生則

あのときは（点を）とられた後だったので、流れを取り戻したいという一心でした。結果的に、後半からはランプレーが出せましたが前半からもう少しイケていれば良かったですね。

●LB玉井撰人

個人的な能力がめちゃくちゃ高い相手でした。得点は取られて当たり前、ぐらいの気持ちで集中していこうと心がけました。

●DL佐々木康元（主将）

こっちにきてからまとまりだして、チームとして今日は凄く良かった。最後の最後でひとつのチームに成れた実感があります。

●DL脇坂康生

今日はオフenseも調子が良さそうなので、ディフェンスは辛抱して、終わってみれば勝ててればいいな、ぐらいのつもりで頑張りました。

●QB富澤優一

ラインが1対1で勝っていましたので、自分としては安心してやれました。板井さんと

はようやくあうんの呼吸が出来てきたので、このチームでもう少しやりたいですね（笑）。

●WR板井征人

後半あれだけランが出ると、自分の役目はなくなりましたね（笑）。半年かけて作ってきたチームなので、今日の喜びはひとしおです。

●エドムント・レイオス（メキシコヘッドコーチ） トップゲームにふさわしいJ A P A Nとの戦いであった。ミステイクの差、コーチングの力がこのような結果になったと思っている。ここからネクストチャンピオンシップが始まる。

／／／／／／／／／／／／／／／／
AmericanFootball WorldCup2003 NEWS

No.006 2003.7.14
／／／／／／／／／／／／／／／／

7月14日15時20分。日本代表チームが凱旋帰国した。
機中ではチーム偶然居合わせたツアー観光客らに祝福の拍手を受ける一幕もあり、一人ひとりが成し遂げたことへの誇りを胸に東京国際空港に舞い戻った。

ここから日常の社会人、学生としての生活に戻るのだ。日本代表チームとして最後の儀式、解散式が空港到着ゲート手前の少し広まった場所で行われた。

「日本のフットボール史、世界のフットボール史に残る君たちを祝福したい」。金澤好夫ワールドカップ実行委員長が選手達を称える。

試合前は様々な憶測もあったI F A F審判団であったが「日本代表チームは実に素晴らしかった」と高く評価。『ワールドカップ・フェアプレーチーム賞』を日本代表に贈った。

「最終目的は達成した」と阿部敏彰日本代表チーム監督。「1つ1つのことに誇りを持って欲しい。一生変わらぬ宝物を手に入れたのだから」。

この結果を得るまでの険しい道のりが選手達一人ひとりの心に甦る。「俺はどこにいても君たちのことを忘れない。チャンスがあれば、また世界に飛び出して行って“J A P A N”の可能性を追求して欲しい」と阿部監督。

明日からは、また互いのチームでしのぎを削る相手となるチームメイト達。しかし“チームJ A P A N”として共に過ごした日々を、これからの糧として、互いに成長して行って欲しい。そんな想いが伝わってくる。

「次に目指すのは北米。カナダだ！アメリカだ！」。佐々木主将が最後に吠える。

そう。日本のフットボーラーの目指す道は、まだ終着点ではない。あの果てしなく大きな国が残っている。きょうの日を軌跡として、さらなる舞台を目指す者。大きく羽ばたく者。“J A P A N”の挑戦は、まだほんの入り口に過ぎないのだ。

ワールドカップ2003の開催地ドイツ。試合会場の横にあった小さな公園で、ダ円球を使って“ドッチボール”をして遊んでいたドイツの子供達。小学生ぐらいの年齢であろうか、みな素晴らしいスパイラルのボールを投げていたことを付け加えておきたい。

N F L ヨーロッパを3チームフランチャイズするこの国は、やがて脅威の存在となって日本代表の前に立ちはだかるであろう。

ドイツの地まで、試合を見届けに来た韓国協会のメンバー達。「日本を目標とする」と宣言したフランス代表。そして「コングラチレーション！でもこの次は負けませんよ」（メキシコの報道関係者）と雪辱を期すメキシコ。

この2003年大会をきっかけに“アメリカンフットボールワールドカップ”が、新たな扉を開いたことは間違いない。

J A P A Nの挑戦は、今日から新たな時代を迎えたのだ。